

華東農村訪問調査報告(6) : 2011年11月, 江蘇省の農村

著者	弁納 才一
雑誌名	金沢大学経済論集 = Kanazawa University Economic Review
巻 号	32 2
ページ	195-209
発行年	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2297/30427

華東農村訪問調査報告(6)

—— 2011年11月、江蘇省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

今回、筆者は2011年11月3日から13日までの約10日間にわたって中国の上海・無錫・南京を訪問した。そして、各地において近現代中国農村経済史に関する資料を収集すると同時に、農村を参観し、あるいは、聞き取り調査を行った。

華東農村における聞き取り調査も、今回で6回目になるが¹⁾、今回、聞き取りを行ったのはこれまでも何度か訪問している江蘇省無錫市の2つの農村(馬鞍村と小丁巷)のみとなった。今回の聞き取り調査も、無錫市政治協商委員会研究室主任の湯可司氏の支援と協力によって順調に実施された。

一方、筆者は、単独日帰りで無錫から高速バスに乗って蘇北の靖江市まで行き、また、上海から高速鉄道に乗って浙江省桐郷市まで行った。靖江市と桐郷市への訪問は今回が初めてであるが、いわゆる農村地域における交通インフラもかなり整備されていたことに驚かされた。蘇北への訪問としては揚州について2回目であり、また、桐郷市に隣接する嘉興市と余杭県(現在は杭州市余杭区)にはすでに訪問したことがある。

本稿では、無錫市の2つの農村における聞き取り調査の内容と靖江市・桐郷市への参観・訪問について記録しておくことにした。なお、本稿でも、前稿までと同様に、煩雑さを避けるために、原則として常用漢字と算用数字を用いた。

I 江蘇省無錫市

(1) 馬鞍村

今回も、王望栄・王少生・呉文勉の3人から話を聞くことができた。3人とも元気であり、共通語で話してくれ、とりわけ呉文勉氏は筆者が聞き取れない部分を筆記して補ってくれた。そして、聞き取りを終えて帰る前に村を一巡してみたが、村が消えてさら地になっているところがあった。

訪 問 日 時：2011年11月5日 10：15～11：30, 12：30～15：00

訪 問 場 所：無錫琳達織造有限公司会議室

聞き取り対象者：王望栄・王少生・呉文勉

聞 き 手：湯可可・弁納才一

王望栄の家族史

・父(王景春)は1949年に59歳で死去し、母(堵三大、馬鞍村蔡巷²⁾(写真1を参照)の出身)は1935年に44歳で死去した。父は兄・姉との3人きょうだいだだったが、その兄は30歳代で死去し、また、その姉(閩江へ嫁した)は40歳代で死去した。

写真1. 馬鞍村蔡巷



・私には3人の妹と3人の兄弟がいた。1番目の妹(王風妹, 85歳)と2番目の妹(王菊妹, 80歳)は胡埭鎮に嫁し、3番目の妹(王杏娣, 76歳)は無錫市区に嫁した。一方、1番目の兄(王明奇)は7歳で死去し、2番目の

兄(王朝奇)は6歳で死去し、弟(王望華)も6歳で死去した。皆、浮腫病にかかって死んだ。

- ・解放前、我が家は8人家族(父と7人の子供)で、土地が不足していて家族を養えなかったので、邵巷山照天湾里へ行って荒地(12畝)を開墾し、山芋を栽培した。山芋は1畝当たり3,000斤余りの収穫があった。そして、当時、3斤の山芋は1斤の水稻と交換することができた³⁾。

王少生の家族史

- ・父親(王錫根)は1892年(辰年)生まれで、母親(楊秀英、ここから2里離れた胡埭鎮東街の出身)は1893年(巳年)生まれである。
- ・土地改革直前頃、2人の兄はすでに結婚して分家し(土地を均分相続した)、父親・母親と私の3人家族で6畝(父親が3畝、私が3畝)の土地を所有する「中農」(土地改革時の階級評価か?)だった。
- ・私(1933年の酉年生まれ)には3人の姉と2人の兄がいた。1番目の姉は武進県雪堰橋に嫁し、2番目の姉は雪堰橋湯荘に嫁し、3番目の姉は胡埭鎮に嫁した。上の兄(王炳生、亥年生まれ)は84歳で死去し(今生きていれば101歳になる)、下の兄(王桂生、亥年生まれ)は77歳で死去した(今生きていれば89歳になる)。
- ・私には3人の子供がいる。長男の王建仁(55歳、酉年生まれ)は本村人10人余りを雇って白葉山で小さな工場(「板焊」)を経営しており、その妻は錢亜芬で、雪堰橋の出身である。次男の王建亮(48歳、辰年生まれ)は「供銷(銷售員)」をやっており、その妻は殷玉芬で、上山村の出身である。長女の王小妹(50歳、寅年生まれ)は前呉巷に嫁した。
- ・現在、私が1人だけで家族が食べるくらいの蔬菜などを栽培している(実質的に脱農化している)。実は、すでに農地の大部分は政府に収用・徴収・買収されたという(マンションや工場用地になっているのだろうか?)。

解放前

- ・本村からは上海などに働きに出る者もいた。
- ・1928年頃から1937年まで養蚕合作社があった(それが合作社であるという認識は持っていなかったという)。養蚕量が多い家が参加したが、養蚕量の少ない家は参加しなかった。蚕の「共育室」(蚕の共同飼育室で、消毒

も行われた)に政府などから派遣された指導員が改良蚕種を導入して三眠まで飼育した(「稚蚕共育」)後、それぞれの養蚕農家に蚕を分けて養蚕させた。

- ・当時、王庭玉が合作社・「共育室」を経営し、5部屋のうちの3部屋で「稚蚕共育」を行い、残りの2部屋には指導員が宿泊していた。その合作社に参加した社員は「共育費」を支払って「保暖(暖種-蚕種を暖める)・消毒・飼養」(カッコ内は引用者)を行った。

人民公社時期

- ・我々の生産隊の中には、こっそりと馬山(太湖沿岸部)へ出かけて池を作り、養魚を行う「脑袋靈活」(頭の回転が速い)な若者が10人余りいた⁴⁾。例えば、現在、工場を経営している王建芳やすでに死去した王振威などがいた。他にも、「泥瓦匠・木匠」(左官・大工)をやる者も多くいて、こっそりと出稼ぎに出ていたが、生産大隊が人を派遣して連れ戻しに行った。

家譜

- ・王少生氏の家には家譜はないが⁵⁾、王望榮氏の家には1948年に作成された家譜と1996年に改訂した家譜があるという(次回の聞き取り調査では、事前に連絡をとっておけば、王家の家譜を見せてもらうことができるかもしれない)。
- ・王少生氏と王望榮氏は同じ王家の第22輩で、同輩であるという(ただし、王望榮氏の方が年上であるせいか、前回と同様に、王望榮氏が積極的に話しをするのに対して、王少生氏はやや控えめであるという印象を受けた)。
- ・王家の家系は、北宋王朝初代皇帝趙匡胤に遡ることができるという。すなわち、初代皇帝の下で大臣を務めていた時、匡氏を名乗っていたが、趙匡胤の「匡」という字と同じ氏を名乗るのは畏れ多いということで、「匡」の名字から「はこがまえ」をはずして王姓を名乗ることになったという。やがて、南宋王朝時代に遡る(北宋王朝が開封から臨安・杭州へ逃避した)時、ともに南下してきた。

祠堂

- ・解放前、本村には4つの祠堂があった。そのうち、王家の祠堂が12間あつ

て最大で、呉家の祠堂は6間、銭家の祠堂(銭家巷)は2間、陶家の祠堂は1間だった。現在は全ての祠堂が無くなっている。

- ・祠堂に関する活動は、清明節の時に「掃墓」(墓参りと墓掃除)をし、冬至には「祭祖」を行ったが、男性のみが参加し、女性は参加しなかった(女性は参加することが許されていなかったのであろう)。

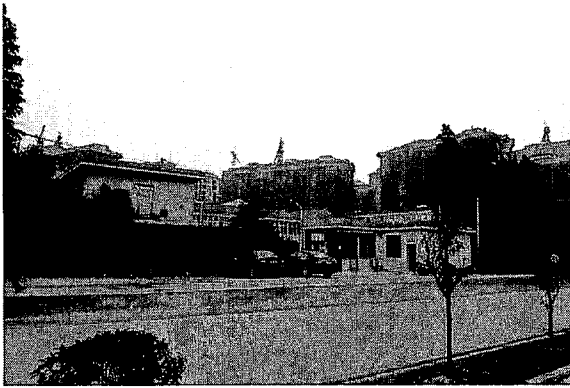
節場(廟会)

- ・かつて胡埭地区には3箇所(箇所)に廟会(節場)があった。1つ目は、自然災害があった年(不定期)に胡埭鎮大老爺(大老爺殿という廟があった)で「出会」(演劇が行われ、露天商が開店する)が行われた。2つ目は、蔡村庵で「唱廟戲」(歌・演奏や演劇。もちろん、多くの露天商も店を開いたと考えられる)が毎年旧暦2月2日に1日だけ行われた。3つ目は、白堊山廟で「唱廟戲」が毎年旧暦3月5日と7月5日の2回、2日間にわたって行われた。
- ・他にも、賁巷里で「唱廟戲」が1日だけ行われ、また、華蔵寺で毎年4月8日に大きな廟会があり、主に農具が売られた。
- ・解放後、上記のほとんどの廟会は停止した。ただし、華蔵寺の廟会だけは継続され、1966年からは場所を華蔵寺から胡埭鎮に移して新暦5月1日に行われたが、実際には「購物節」(露天商が物を売るだけ?)になってしまった。

今回も、聞き取りを行った同工場内の食堂(個室)で昼食をごちそうになった。そして、3人の聞き取り対象者は昼寝・休憩をすることもほとんどなく、午後も聞き取りが続けられた。

現在、同工場の周辺には多くの高層ビルが建設中で(写真2を参照)、周辺一帯の農地は完全に消滅している。なお、聞き取り調査が終わった後で、呉文勉氏が湯可可氏にいくつかの資料と地方誌を提供していた⁵⁾。

写真2. 無錫琳達織造有限公司の工場及びその周辺



(2) 小丁巷

今回は、丁炳生氏に続いて黄三度氏も体調がすぐれないので、来ていなかった。なお、栄紀仁氏は、午前中、畑仕事をしていたと言って、収穫した野菜類などを見せてもらったが、日本ではあまり見かけない種類の野菜が多かった(湯可可氏は帰る際に、その野菜を土産として持ち帰ることになった)。家族が食べる分の野菜類を栽培しているようである。その畑は歩いて約40分(車で約10分)のところにあるという。なお、今回の聞き取り調査の際に、その畑を見せてもらうことにした。

訪 問 日 時：2011年11月6日 14：10～16：30

聞き取り場所：栄紀仁氏宅

聞き取り対象者：栄紀仁

聞 き 手：湯可可・弁納才一

栄紀仁の家族史

- ・父(栄湧泉)は、1898年(戊年)生まれで、私塾で勉強したことがあって読み書きができたので、16歳の時から上海の商店で働いていた。その店では、午前中、生肉を購入し、昼から生肉を加工して(焼いて)売っていた。

だが、1937年に日本軍が上海に侵略して来ると、その店の主人が避難・逃亡したので、店は閉鎖され、働くことができなくなった。抗日戦争後の1946年から1947年まで、再び上海に戻って商店(かつて働いていた商店と同じか否かは不明)で働いた。なお、無錫の陸稿荐肉庄⁶⁾(無錫では中山路と崇寧路が交差するところにある三鳳橋肉庄とともに有名で、現在は無錫排骨などを販売している。)で働いたのは戦時中なのか戦後なのかはよく聞き取れなかった。

- ・父は弟と妹の3人兄弟だった。父の弟(榮茂生)は榮家企業が創設した工場である公益工商中学実習工廠や公益鉄工廠などで働いていたが、戦時中に夫婦ともども亡くなったので、その3人の子供は私の父が養育した。また、父の妹(榮菊仙)は東山の茶場の朱和尚に嫁した。
- ・母(姓は李だが、とくに名前はなかった。ただし、兄弟姉妹の中で最初に生まれので、さしあたり、幼名は阿大とされた)は、1901年(丑年)生まれで、教育を受けなかったので、読み書きができなかった。母には5人の弟と1人の妹(これらの弟と妹はみな中学校を卒業した)がいた。母は西漳大李樹村(無錫の東北部)の出身である。母の父親は無錫県の監獄の役人で、農家ではなかったので、母は農作業の経験が全く無く、嫁してから初めて農業にも従事するようになって、農作業に慣れていなかったせいか、30歳の時、稲の刈り入れの際に稲の穂が目に入って目を悪くしてしまった。一方、母は農作業や家事の合間などに靴下編みの家内副業をしていた(詳細は後述)。母は1954年7月に肝炎で亡くなった。
- ・姉が生まれた後、2人の兄が生まれたが、すぐに死んでしまったので、結局、姉と私の2人きょうだいとなった。姉(榮愛娣)は、1925年生まれで、榮巷市区の龍山村賈湾(東大池のほとり)に嫁したが、母とは違って靴下編みはできなかった。
- ・妻の高麗明は、1938年(寅年)生まれで、鄭巷の出身である。妻の実家の高家はもともと紳士だったが、後に商売をするようになった。

民国期の家内副業－靴下の製造

- ・かつて榮紀仁氏の母親が作っていた靴下は前貸問屋制家内手工業だった。すなわち、無錫市小木橋にあった「襪行」(靴下問屋。当時は自転車が無かつ

たので、約1時間半かけて歩いて行った。栄家企業の新申三廠(現在は民族工業博物館となっている。写真3を参照)の近くにあったという)から5斤の棉花と1日当たり5～6銅元の加工費を受け取り、10打の靴下(12足で1打)と交換した。

写真3. 新申三廠(現在、中国民族工業博物館)



- ・当時、1銅元は10方孔元銭で、100銅元は1銀元だった(日常的には銅銭が使用されていたのだろう)。
- ・「襪行」から受け取った棉花から糸を紡ぎ、その綿糸(土糸)で靴下を編んだ。靴下を編む器械(道具)は非常に簡単なもので安かったが、織布機は高価で、購入することができなかつたので、土布を作ることはなかつた(無錫の北部の江陰県では土布の生産が盛んだつた)。

II 参観地・訪問地

(1) 江蘇省靖江市

2011年11月4日午前、無錫から高速バスに乗って長江にかかっている江陰大橋を超えて蘇北の靖江市まで行った。これまで江陰には何度か訪れたこと

があったが、その北の長江を渡って靖江市まで行ったのは今回が初めてだった。江陰から江陰大橋を渡りきった長江沿いの靖江市南部は経済開発区になっており、工場・ビルなどが林立していた。

また、無錫のバスターミナルは、かつて鉄道の無錫駅南広場の隣にあったが、現在、無錫駅北広場に遷っており(鉄道の無錫駅からはかなり離れている)、新しい巨大なバスターミナルの一部はまだ未完成だった。

9:20に無錫市のバスターミナルを出発し、高速道路を走行して10:00に靖江市のバスターミナルに到着した(片道の運賃は25円で、40分を要した)。中国の他の地方都市と同様に、靖江市郊外には高層マンションが乱立しており、同市街地にも高層ビルが建設され始めていたが、再開発されたばかりの繁華街は意外にも閑散としていた。なお、靖江の方言は無錫や江陰の方言に近い感じがした。言語の面では同じ蘇北の揚州(共通語に近い)とはかなり異なっている。

靖江バスターミナル周辺一帯は、同バスターミナルの前にいたバイクタクシーの客引きによると、経済開発区(新区)になっているという。たしかに、同バスターミナルは『江蘇省地図冊』に載っている場所よりもやや郊外に位置していた。同バスターミナルに到着後すぐに近くの商店で靖江の地図を購入し(同ターミナル内では売っていなかった)、バスで靖江市政府へ移動した(同市内のバス運賃は一律1元。ちなみに、無錫市内は一律2元)。また、靖江市政府の建物も、持参した地図帳とは位置が違っており(郊外に移転している)、最近、新しく建設されたばかりなのであろう。

新しい靖江市政府の建物には、市政府や市政协協商委員会の看板もなく、正門からは博物館と档案馆の看板が見えるだけである。建物の中には靖江市档案馆に関する説明があった。

靖江市政府の守衛が内線電話で問い合わせをし、同市政府の建物の2階にある市史志档案弁公室の年鑑科・地方志科と党史科に行くように指示されたが、靖江の文史資料などは発行されておらず、『靖江県志』⁷⁾と『靖江市年鑑』のみしか閲覧することができなかった。また、档案資料と党史資料は刊行しているが、農村経済関係の資料は全く刊行されていないという。

ところが、靖江が昔から加工豚肉(猪肉脯)の生産で最も有名であることを

告げると、『靖江市年鑑』の中に猪肉脯に関する記載があることを教えていただき、若い2人の職員が同年鑑の中の猪肉脯に関して記載している部分を熱心に見つけてくれた。そして、『靖江市年鑑』は販売しているというが、やや高額なので、必要な部分を複写したいと申し出ると、電子メールで必要な部分を無料で送付していただくことになった(すでに筆者が帰国する前に添付ファイルで『靖江市年鑑』のデータを送っていただいていたが、残念ながらそれを開くことができなかつたので、近いうちに再訪する旨の返信メールを送っておいた)。

最後に、靖江の猪肉脯の中でも最も有名なのが双魚肉脯(双魚牌のもの)だということで、市史志档案弁公室副主任の丁次建(写真4を参照)は、かつて双魚猪肉脯の企業で工場長(廠長)と社長(經理)を務めていたという丁金隆氏と陳士榮氏を紹介してやると言い出したが、今回は時間がなかつたので、直接会って話しを聞くことはできなかつた。ただし、靖江市政府を出た後、バスに乗って双魚牌猪肉脯会社の前まで行き、場所を確認した。その周辺には双魚牌猪肉脯の販売店が多かつた。

写真4. (左から)丁次建・筆者・党史科科長の郭文冰



なお、靖江市政府市史志档案弁公室で紹介され、同市内で最も大きな新華書店(研究上で参考になる文献資料類は全くないという説明を受けていた)である靖江書城を探し歩いたが、見つけることができなかつた。また、今回は残念ながら靖江の農村地域を訪問することができなかつた。

(2) 浙江省桐郷市

2011年11月11日午前、上海虹橋駅から高速鉄道に乗って浙江省桐郷市の桐郷火車站まで行った(所要時間はわずか30分余りだった)。

桐郷火車站(待合室にはコンビニの他に嘉興粽を売る専門店があった)の周辺には工場やマンションなどの建物が全くなく、畑のど真ん中にぽつんと駅舎が建設されたような感じだった。また、同駅ターミナル内では桐郷市の地図を買うことができなかつた上に⁸⁾、桐郷市区へ行くバスもなかなか出発しそうななかつたので、桐郷市政府までタクシーに乗って行ったが、途中で浙江省桐郷経済開発区の立て看板も見え、かなりの距離があつてタクシー代は34元かかつた。なお、桐郷火車站の前にも、「桐郷経済開発区歓迎」⁹⁾という大きな看板があつた。

ちなみに、帰りは桐郷市区内から桐郷火車站までは桐郷市区内を走行するバスでまず桐郷客運中心(桐郷バスターミナル)まで移動し、そこから桐郷火車站行きのバスに乗り換えて⁹⁾、無錫までもどつた。運賃は各2元で合わせてわずかに4元しかかからなかつた。

実は、最初にタクシーが到着したのは桐郷市政府の裏門前だったが、同市政府の守衛が桐郷市政治協商委員会までわざわざつれて行ってくれた。同委員会秘書長の傅林林氏によると、地方志や文史資料などの政治協商委員会の刊行物は全く販売していないが、隣接する桐郷市図書館にはそれらの資料が蔵置されており、しかも、全ての文献資料を外国人にも公開しており、ここでは閲覧・複写が可能であるという説明を受けた。事実上の門前払いをくらつたような気がしたが、とりあえず桐郷市図書館に行ってみた。すると、文史資料などは3階に集中的に蔵置されていたが、筆者以外の利用者は全くいなかった。

この地方文献参考閲覧室には職員が1人だけしかいなかった。この日、担当していた職員(許超氏)は、湖北省出身だが、黒竜江大学を卒業した若い人だった。『桐郷文史資料』の目次と一部分の複写を依頼すると、当該館の規定では複写費が1枚0.5元となつていたが、今回は複写費を免除してもらつた。

桐郷火車站の出入り口がある側とは反対側に駅に最も近い南日鎮越豊村安橋頭という村があつた。当該村における農産物の作付状況を見てみると、蔬

菜以外に収穫間近の稲(晩稲か?)や養蚕の時期が終わったために葉のない桑の木が多く見られるが、意外にも棉花の栽培も多かった(写真5・写真6を参照)。なお、当該村内では、全く若者の姿を見かけなかった。とりわけ、農地や農家の前庭で農作業をしていたのは全て高齢者だった。

この村は3階建ての家屋が多く、しかも、比較的新しい(写真5・写真6・写真7を参照)。これは、相対的に収入が多く、裕福であることを反映していると考えられる。

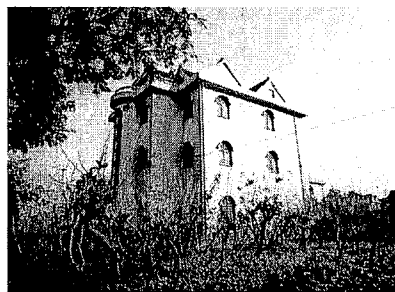
写真5. 農家(左上)と稲(手前)・棉花(中央やや上)



写真6. 一般農家と桑・蔬菜



写真7. 農民の豪邸と桑・蔬菜



前庭で収穫した棉花を乾燥させている農家を見付けたので(写真8を参照),訪ねてみると,土間のようなところに2人の老婆がおり,この棉花で自分たちが着る服(材料となる土布)を作るのだと共通語で話してくれた。

なお,皮革城としては隣接する海寧市が有名だが,桐郷火車站の近くにも,桐郷皮革城があり(写真9を参照),また,昔から養蚕業・蚕糸業が盛んな土地柄だったことから蚕糸城もあった。

写真8. 農家の前庭で乾燥させている棉花



写真9. 中国桐郷鞋業皮革城



おわりに

今回も,訪問した無錫の2つの農村では非常に興味深い話を聞くことができた。すなわち,馬鞍村では解放前に養蚕合作社が展開していたにもかかわらず,農民たちにはそれが合作社だとは意識されておらず,また,人民公社時代には厳禁されていたはずの副業がこっそりと行われていた。一方,小丁巷では解放前に靴下編みの副業(織襪業)が前貸問屋制手工業として行われていたが,これは無錫の都市近郊農村では養蚕業や土布業に代替して織襪業が副業となっていたことを明らかにした筆者の研究を裏付ける事例ともなっている¹⁰⁾。このように,無錫市街地に近い小丁巷とそれよりやや離れている馬鞍村では農村経済の状況にも差異が見られた。

ところで,今回,上海・無錫・南京で鉄道の切符を購入する際に,窓口で身分証(外国人はパスポート)の提示を求められたが(1つの身分証で複数枚

の切符を購入することはできない), その理由は不明である。

無錫市の地下鉄は2014年に開通予定で, 地下鉄が開通すれば, 無錫市街地から栄巷鎮(小丁巷)まで地下鉄で行くことができるようになる。近年, 上海市と同様に, 無錫市も市街地が急速に拡大しつつある。

一方, 南京市では地下鉄2号線(各々の延長線を含む)がすでに開通しており, 現在, 地下鉄3号線が建設中である。

各地の書店で研究書・専門書を見てみると, 筆者の研究分野に関連する経済学や歴史学でも生態系・循環経済・環境などを意識した研究が数多く出てきている。

最後に, 今回の無錫における聞き取り調査で改めて感じたことは, 1949年の解放前の話しを聞くことができる老人が高齢化の進行によって急速に少なくなっており, 聞き取りが困難になっているということである。

注

- 1) 筆者がこれまで華東農村において行ってきた聞き取り調査については, 拙稿「華東農村訪問調査報告(1)―2008年3月, 江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)―2008年9月, 江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号, 2009年3月)・同「華東農村訪問調査報告(3)―2009年3月, 江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号, 2009年12月)・同「華東農村訪問調査報告(4)―2010年2月・3月, 江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号, 2010年12月)・同「華東農村訪問調査報告(5)―2010年12月, 江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号, 2011年12月)を参照されたい。
- 2) 聞き取り調査が終わった後で参観したが, 現在, 馬鞍村蔡巷には農家も農地もほとんど無く, 当該村はほぼ消滅しており, その一部は遺跡の発掘作業が行われ, 呉文勉氏の親戚にあたる数人の村民が作業をしていた。
- 3) 前掲拙稿「華東農村訪問調査報告(5)―2010年12月, 江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号, 2011年12月)183頁を参照されたい。また, 土地所有状況などについては, 呉文勉・武力『馬鞍村的百年滄桑―中国村庄経済与社会変遷研究』(中国経済出版社, 2006年)104頁を参照されたい。
- 4) 同上書『馬鞍村的百年滄桑―中国村庄経済与社会変遷研究』343頁を参照されたい。
- 5) その中に, 無錫市胡埭鎮志編纂委員会編『胡埭鎮志』(方志出版社, 2010年, 150元)があった。

- 6) 陸橋荐肉庄は宿泊していたホテル(中山路と人民中路の交差するところにあった)のすぐ近くでたまたま見付けたが、本来の本店は勝利門にあったようである。現在、勝利門一帯は高層ビルが林立するなど開発が進んでおり、陸橋荐肉庄は見当たらない。
- 7) 靖江県志編纂弁公室編『靖江県志』(江蘇人民出版社, 1992年)。
- 8) 街中の報刊亭(新聞・雑誌を売っている)で購入した桐郷市地図で確認してみると、桐郷火車站は桐郷市区の南部に広がる浙江省經濟開發区の中に位置していることがわかった。
- 9) 筆者がバスに乗ると、中学生くらいの男の子が席を譲ってくれた。その少年には筆者が高齢者に見えたのだろうか。いずれにせよ、かつての争って席取りをしていた頃とは隔世の感がある。
- 10) 拙著『華中農村經濟と近代化—近代中国農村經濟史像の再構築への試み』(汲古書院, 2004年)第2編第6章を参照されたい。